十勝に戻った今、亡き父を思う

十勝医師会
帯広徳洲会病院
朴澤（ほうざわ）　憲和（のりかず）

私は上川郡清水町と帯広市で働く開業医のもとに生まれ、幼少期を清水町と帯広市で過ごした。帯広の高校を卒業後、大阪の大学に進学、卒業後は大阪で内科医として研修を行った。その後９年４か月の間、鹿児島県にある離島の小規模病院と二次離島の診療所･巡回診療の形で、地域医療に従事していた。

決して楽ではないものの、患者との関わりから得られるものは大きく、長い年月を過ごしていた。この度父の療養・逝去を機に十勝に戻り、2022年８月より現在の病院で勤務している。

離島・へき地で医療を行う上で、疾病に関する知識や対応の重要性は勿論、患者の生活背景や家族、地域事情も考えて医療を行うことの重要性を学んだ。そして、地域医療を実践する中で、自分自身の背景やルーツを知り、家族を大切にすることも重要であると気付いた。

今回本稿の執筆依頼を頂き、自身と父に関して、振り返ることとした。

父　朴澤英憲は、清水町で生まれ育ち、岩手医科大学を卒業後、北海道大学や釧路労災病院で勤務した後、1979年に故郷の清水町に朴澤病院（後の啓仁会病院）を開業した。また1983年には帯広市にも十勝胃腸クリニックも開設し、祖父啓一や他の先生方とともに、専門領域の消化器だけでなく、幅広い領域に対応しながら､長年地域医療に従事していた(病院は2021年８月に閉院、クリニックは「ほうざわ内科クリニック」として兄が独立・開業している)。車椅子用のトイレや入浴設備などの設備の導入や、消化器疾患・内視鏡など専門性を持ちながらも患者の困りごとに対応する気概、そして職員を大切にする姿勢は、一貫して持ち続け、実践していた。なお、開業当時新聞のインタビューで｢患者中心の医療を｣と答えているのを、父が亡くなる前に発見した。現在の総合診療の根幹ともいえるマインドを有し、当時から実践していた、とは言い過ぎであろうが、患者やその家族、職員に対する思いやりや愛情、郷里に対する思いは､父の一貫した特徴であったと思う。

一方、その当時医師の家庭は大半がそうであったと思うが、父は仕事で家を空けることが多く、幼少期を一緒に過ごした記憶は、多くはない。医療機関の会合や仕事上の付き合いで出かけることもあり、医師であることが､父にとって一番大切なのだろう、と感じていた。幸いにも母や兄弟がよく相手をしてくれたこともあり、医師の家庭とはそういうものだと思い、寂しさはあまりなかった。

そんな私も医師になり、診療や組織運営などを経験する中で、父が背負ってきたものの重さを、いくらか理解するようになった。

また、私自身も子を持つ親となり、仕事と家庭の両立は想像以上に大変であることを感じた。子育てを行う中で、自身の幼少期に父と自宅で雑炊やうどんを一緒に作り、清水町の邸宅で焼き肉や園芸を行ったことを、思い出した。

また、たまの休みには温泉やデパート、食事に連れて行ってくれたこと、大学の卒業時など大きな節目の際には、大阪まで来て、式に参加し、喜んでくれたことも思い出した。

そして、2017年に東京で開催された内科学会総会に行ったことが、父との最後の遠出であったが、私が執筆した医学雑誌を買い、東京国際フォーラムの喫茶店で読み､｢勉強になったよ､ありがとう｣と言ったのを聞き、嬉しく思ったことは、今でもよく覚えている。

また、晩年父が孫に対して向ける穏やかな笑顔やその接し方を見て、医師･経営者として多忙であり、一緒にいられる時間は少なくとも、彼なりに家族に対して幸せを願い、見守っていたのだろう、と今は思っている。

振り返れば、今の自分の趣味・嗜好も、離島で地域医療を実践してきた自身のキャリアも、少なからず父の影響を受けていることを今回感じた。奇しくも父が清水町に病院を開設した時と同じ年齢の時に十勝で医療を行うことになったことも、何かの導きなのかもしれない。

一周忌を終え、今父は何をしているだろう、と、ふと思った。おそらく、白衣を来て診療し、夜には祖父や友人と酒を酌み交わし、医学を論じているだろう。

そして、私たち家族を見て、微笑んでいることだろう。

私は病院などを直接の形で後継はしなかったが、父の患者や地域、医療への思いや姿勢を継承しながら、私なりに、医師として、夫として、父親としての責務を果たしていきたいと思う。

最後に、帯広市医師会および十勝医師会の会員であった父　英憲が、生前医師会会員の皆様や各医療関係の皆様、患者さんや地域の方々に長年お世話になったことを、この場を借りて御礼申し上げる。